百々裏話（30）

おもて　あきら

【上がかり・下がかり】

シテ方五流のうち、観世流と宝生流が上がかり、金春・金剛・喜多の三流が下がかりであることは、能の方ではまず常識と言えよう。ワキ方に下がかり宝生流があるし、この両語は、今も生きているし、今後も生き続ける言葉であろうと思われる。

ところで、この「上がかり」「下がかり」の語は、前回にも少し触れたように、そんなに古い言葉ではなく、室町時代末期から始まった言い方のようである。管見では、続群書類従所収の『申楽聞書』（鴻山文庫蔵の細川十部伝書の中の同名の本〈江戸初期の写本〉がその原本らしい）の末尾に、

右之一冊下がかりの物と見えたり
慶長四年四月廿一日一校畢　妙庵玄又

とあるのが、年代の明らかな用例としては最も古い。この識語を書いた妙庵玄又については、細川幽斎の三男の幸隆（法名妙庵）であろうとする説と、そうではあるまいとする説とがあって、必ずしも明瞭ではないが、幽斎の身辺に侍した細川家中の一人であることは確実である。その妙庵が慶長十一年三月吉日に相伝した由を識語に言う伝書が、細川十部伝書の中の『節章句秘伝之抄』に収められているが、その中に、

一、三輪、神楽アリ。上ガヽリニハしらばたらきと云物アリ。はやし、立田ヨリハ少つよし。

とある。ここには「上がかり」、前掲の引用には「下がかり」の用例が見られ、両例ともに、わかりきった言葉のように使用されているのであるから、遅くとも慶長頃には、細川幽斎の周囲などで、上がかり・下がかりの語が、かなり広く行われていたと見られる。妙庵が創始したわけではあるまいから、その用法の発生は室町末期と見て良いのではなかろうか。

ところで、その語義であるが、『申楽聞書』の「下がかり」の場合は、同書が、その冒頭に「金春大夫に肩を並べん猿楽はなし」と言うのをはじめ、金春色の甚だ濃い伝書であることを考えると、「金春がかり」とほぼ同義に用いられていると言えよう。「上がかり」の用例の方は明確でないが、「下がかり」に対する語であることは間違いあるまいから、「観世がかり」の意と見て大過あるまい。少し時代は下るが、『承応神事能評判』に、

爰にて観世金春のかわりの舞やうある所を、かみがゝりにてもしもがかりにてもなく、中にふらりと舞待り。

とある用例なども、上がかり・下がかりが、観世がかり・金春がかりとほぼ同意に使用されていたことを示すようである。大蔵虎明の『聞書並笛集』に、

一、謡に、上にはくると云、下にはしをると云。此謂分有。くると云は頭より出、しをるはほぞより出る也。

とあるのが、前々回に引用した温泉彦次郎伝書の「観世流にくると付を、金春流にしほると付也」の説の展開であることも、「上（がかり）」が観世、「下（がかり）」が金春を主として意味することの傍証となし得よう。観世がかり・金春がかりの言い方に較べれば、同系他流をも包含する感じを伴なっているが、初期の上がかり・下がかりの語の用法は、京がかり・大和がかりと同様に、観世・金春を中心としたものであったようである。

それがそうでなくなったのは、下がかりに属する喜多流の勢力が伸びて、能の二系統の一方を金春だけで代表させることが実状に合わなくなってしまったことと関係がありそう

である。『七太夫仕舞付』の名で知られている万治元年刊の下がかり謡本の奥付には、

右下ガヽリ百番者、七太夫嫡伝之仕舞付、秘密大事悉書加之令板行者也。

と刊語があるが、ここの「下がかり」は、すぐ続いて喜多七太夫の名を出しているのであるから、喜多流をも含めた用法に相違なく、喜多を金春と対等視し、それらを一括した名称として「下がかり」の語を用いているようである。この万治元年の謡本を初め、江戸時代中期までに刊行された下がかりの謡本は、金春とか喜多とか流名を明記することがほとんどなく、単に「下がかり謡本」とのみ奥付や題簽に書いた本が多い（文字は下懸り・下掛り・下係の三様）。本文の内容も何流とは判定し難い中間的な形で、流儀を越えて下がかり三流の人々が使用していたようである。この事実も、上がかりでは観世流と明記した謡本が数多く刊行され、宝生流の人々もそれを使用していたことと対比して考えると、下がかり三流を金春の名で代表せしめ得なくなってきた江戸初期以降の実状を示すかと思われる。寛文五年の秋扇翁の檜垣型付に、「観世は大夫くり也。下がヽりは地よりくる」とあるなど、「観世」と「下がヽり」とを対置した用例が「上がヽり」「下がヽり」の対置に並行して見られることも、まず「下がかり」の方が金春がかりと同意から金春・金剛・喜多を対等に包含した語義へと変化したことを示すように思われる。江戸中期になると、型付類などに上がかり・下がかりの両語を使用する例が多くなり、「上がかり」の方でも、観世がかりの語義から、観世・宝生を対等に包含した語義に変っていると認められる。今日使用されているような語義での上がかり・下がかりの両語の確立は、ほぼ元禄頃と見てよいのではなかろうか。

この上がかり・下がヽりの両語の語原については、『わらんべ草』16段の左の記事が著名である。

上がヽりは、はると云、下がかりには、しほると云。……惣じて上がヽりは、むねより上の音ときこゆる、下がヽりは、筒より出る音也。ふしの付やうも、㊀丸きふしを、上がヽりは、（上をとる。下がヽりは、）下を取て付る。此ゆへに、上がヽり・下がヽりと云と、七太夫も物たり也。

上がかりは上から声を出し、下がかりは下から声を出すからであるとの説であるが、これは、以下に続く節付記号にかこつけた説とともに、いかにもこじつけの感が強く、一般には信じられていない。一般には、申楽伝記や甲子夜話に見える説――観世宝生は京都に住み、金春金剛は大和に住んでいたので、室町幕府に近くの両座を上がかり、遠くの両座を下がかりと称するようになった――が信じられているようである。しかし、それならば前回に考察した「京がヽり・大和がヽり」の語がより適わしいし、上がかり・下がかりの語が、室町幕府が姿を消し、観世大夫が京都に住することが稀になった頃から使用し初めている事実とも合致しない。用例をもっと多く集めて検討してからでなければ判断はできないが、『甲子夜話』説とも『わらんべ草』説とも異なる別の由来があるのではなかろうか

さて、上がかり・下がかりの語に関連する最も大きな問題は、能に於けるこの二つの系統が、いつ、いかなる事情から発生し、どのような過程を経て現在のような相違を生み出したかである。能楽史研究上極めて重要な課題であり、研究者の誰しもが関心を抱くはずのことなのであるが、それについてのまとまった論文はまだ発表されていない。私自身もその解明を志してはいるが、問題が大きいだけに、多くの学徒がこの課題に取り組むことを期待してやまない。

（39・10・27日）